

「『たおやめぶり』というのは、けっしてシンの弱さを言うのじゃなくて、むしろシンの強さを言うのですけれども、愛情などの表現の仕方、原形日本人といえますか、もとの日本人というのは、どうも『たおやめぶり』という匂いが強くなります」

（中公文庫 司馬遼太郎／ドナルド・キーン『日本人と日本文化』）

1 「なる」発想

天地の初発の時、高天の原に成りませる神の名は、天の御中主の神。次に高御産巢日の神。次に神産巢日の神。……次に国稚く、浮かべる脂の如くして水母なす漂へる時に、葦芽のごと萌え騰がる物に因りて成りませる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲の神。次に……次に、……次に伊耶那岐の神。次に妹伊耶那美の神。

（『古事記』『天地の初発』）

河合隼雄「中空構造」

丸山真男「つぎつぎとなりゆくいきほひ」

自然の「おのずから」の働き

「なる」↑↓「うむ」「つくる」（主語あり）

2 「なる」から「うむ」へ（性のゆえん・生殖の説明）——男と女の相補性

ここに天つ神、諸々の命もちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、「このただよへる国を修め理り固め成せ。」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さしたまひき。二柱の神、天の浮橋に立たして、その沼矛を指し下ろして画きたまへば、塩をろこをろに画き鳴して引き上げたまふ時、その矛の末より垂り落つる塩、累なり積もりて島と成りき。これ淤能基呂島なり。その島に天降りまして、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき。

ここに伊邪那美命に問ひて、「汝が身は如何にか成れる」と曰りたまへば、「吾が身は成り成りて、成り合はざる処、一処あり」と答へたまひき。ここに伊邪那岐命、詔りたまはく、「吾が身は成り成りて、成り余れる処、一処あり。故、この吾が身の成り余れる処をもちて、汝が身の成り合はざる処にさし塞ぎて、国土を生み成

さむとおもふ。生むこといかに」とのりたまへば、伊邪那美命、「しか、善けむ」と答へたまひき。

(『古事記』『国生み』)

「なる」ことの成就としての「うむ」

↑↓『旧約聖書』の男・女の描かれ方Ⅱ「つくら」れ方

(第1章27節)神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。
……

(第2章21節)そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。

3 大なる母神(生と死を司る力)

ここに妹伊邪那美の命を相見まくおもほして、黄泉国に追ひ往でましき。…「吾と汝と作れる国、いまだ作り竟へずあれば、還りまさね」と詔りたまひき。ここに伊邪那美の命の答へたまはく、「悔しかも、速く来ます。吾は黄泉戸喫しつ。然れども愛しき我が汝兄の命、入り来ませること恐し。故還りなむを。しまらく黄泉神と論はむ。吾をな視たまひぞ」と、……入り視たまふ時に、蛆たかれころろぎて、頭には大雷居り、胸には火の雷居り、…ここに伊邪那岐の命、見畏しみ逃げ還りたまふ時に、その妹伊邪那美の命、「吾に辱見せつ」と言ひて、すなはち黄泉醜女を遣して追はしめき。……

ここに千引の石をその黄泉比良坂に引き塞へて、その石の中に置いて、おのおの対き立たして、事戸を度す時に、伊邪那美の命のりたまはく、「愛しき我が汝兄の命、かくしたまはば、汝の国の人草、一日に千頭絞り殺さむ」とのりたまひき。ここに伊邪那岐の命、のりたまひく、「愛しき我が汝妹の命、汝然かしたまはば、吾は一日に千五百の産屋を立てむ」とのりたまひき。ここを以ちて一日にかならず千人死に、一日にかならず千五百人なも生まるる。故その伊邪那美の命に号けて黄泉津大神といふ。

(『古事記』『黄泉の国』)

4 「恥」

ここに海神の女、豊玉毘売命、みづからまゐ出て白さく、「妾はすでに妊めるを、今産む時になりぬ。こを念ふに、天つ神の御子は、海原に生むべからず。故、まゐ出きたれりとまをしき。ここにすなはち、その海

辺の波限に、鵜の羽を葦草にして、産殿を造りき。ここにその産殿、未だ葦き合へぬに、御腹の急るに忍びず。故、産殿に入りましき。ここにに産まむとする時に、その日子ちに白して言はく、「およそ他国の人、産む時になれば、本つ国の形を以ちて産むなり。故、妾今、本の身を以ちて産まむとす。願はくは、妾を、な見たまひそ」と言しき。

ここにその言を奇しと思ほして、そのまさに産みますを伺見たまへば、八尋鰐になりて、葡萄ひもこよひき。すなはち、見驚き畏みて、遁げ退きたまひき。ここに豊玉毘売命、その伺見たまひし事を知りて、うら恥づかしとおもほして、その御子を生み置きて…海坂を塞へて返り入りましき。

cf 能「黒塚（安達ヶ原）」

cf 「木の花咲や姫」だけ選び、石長姫を「見畏み、返し送った」

↓ 大山祇命「いたく恥じて」

「ここを以ちて今に至るまで、天皇たちの御命長くまさざるなり」。

5 アマテラス大神（皇祖神としての女神）

天照らす大御神の忌服屋にましまして神御衣織らしめたまふ時に、その服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剥に剥ぎて墮し入るる時に……天照らす大御神見畏て、天の石屋戸を開きてさし隠りましき。ここに高天の原皆暗く、葦原の中つ国悉に闇し。これによりて、常夜往く。ここに萬の神の聲は、さ蠅なす満ち、萬の妖悉に發りき。ここを以ちて八百萬の神、天の安の河原に神集ひて、高御産巢日の神の子思金の神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集へて鳴かしめて、…

（『古事記』『天の岩戸』）

cf 平塚らいてう『元始女性は太陽であつた。——「青鞥」発刊に際して——』

元始、女性は実に太陽であつた。真正の人であつた。今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く病人のやうな蒼白い顔の月である。私共は隠されて仕舞つた我が太陽を今や取戻さねばならぬ。

6 アメノウズメ（場を開く力）

天の宇受賣の命、天の香山の天の日影を手次に繋て、天の眞拆を鬘として、天の香山の小竹葉を手草に結びて、天の石屋戸に覆槽伏せて蹈みとどろこし、神懸りして、胸乳を掛き出で、裳の緒を陰に押し垂りき。ここに高天の原動て八百萬の神共に咲ひき。ここに天照らす大御神怪しとおもほして、天の石屋戸を細めに開きて内より告りたまはく、「吾が隠りますに因りて、天の原おのづから闇く、葦原の中つ国も皆闇けむと思ふを、何とかも天の宇受賣は樂し、また八百萬の神諸咲ふ」とのりたまひき。ここに天の宇受賣白さく、「汝命に勝りて貴き神いますが故に、歡喜咲ひ樂ぶ」と白しき。かく言ふ間に、天の兒屋の命、布刀玉の命、その鏡をさし出でて、天照らす大御神に見せまつる時に、天照らす大御神いよ奇しと思ほして、やや戸より出でて臨みます時に、その隠り立てる手力男の神、その御手を取りて引き出だしまつりき。すなはち布刀玉の命、尻久米繩をその御後方に控き度して白さく、「ここより内にな還り入りたまひそ」とまをしき。かれ天照らす大御神の出でます時に、高天の原と葦原の中つ国とおのづから照り明りき。

（『古事記』『天の岩戸』）

c f 「女の力を忌み怖れたのも、本来はまったく女の力を信じた結果」

（株式会社 KADOKAWA 柳田国男『妹の力』）